

2022年6月12日 主日礼拝(あけぼの幼稚園創立感謝)

説教題「生き方は神へのささげもの」ルカ福音書 11 章 5～13 節

主任牧師 加藤 誠

「求めなさい、そうすれば、与えられる。探しなさい、そうすれば、見つかる。門をたたきなさい、そうすれば、開かれる。」(ルカ 11 章9節)

あけぼの幼稚園は今年創立 73 周年を迎え、一昨日の創立感謝礼拝では新しい礼拝堂いっぱい子どもたちの賛美の音が響きました。77 年前の 1945 年、戦争の空襲でこのあたりは一面の焼け野原となっていた時、主なる神は大井教会に一つの祈りを起こされました。焼野原を駆け回って遊んでいる子どもたちのための幼稚園をつくろうという祈りです。初代牧師の大谷賢二先生は「このたびの愚かな戦争を教会は止めることができなかつた。もう二度と悲惨な戦争を起こさないために、聖書の愛と正義に基づいた人材を育てることが必要だ」と考えられたのです。ただ、後に大谷賢二先生は「自分は幼稚園が嫌いだった」と書かれています。「幼稚園は教会の働きの足手まといになる」と考えていたと。つまり幼稚園の働きは、自分から進んで求めたというよりも、焼野原で遊ぶ子どもたちの姿に心動かされて、やむにやまれぬ思いから始まった働きだったのでした。けれども、その幼稚園の働きを神さまは豊かに祝してくださったのです。

先月、71 歳で天に召された Y さんのご一家は、二人の息子さんのあけぼの幼稚園入園を機に大井教会の礼拝に出席されるようになり、最初にお連れ合いの H さんが、そして後に Y さんが信仰に導かれます。Y さんは生涯「求道者」を自認し、そのノートには聖書の言葉やいろいろな人の言葉、自分が思い巡らした言葉が記されていたのですが、ワープロにわざわざ印字されたメモに遺された二つの言葉が印象に残りました。一つは「人生は神からのプレゼント。生き方は神へのささげもの」というアメリカのテニス選手の言葉。もう一つは東日本大震災の時に Y さん自身が記した「神は与え、神は奪う。しかし最後に残るのは愛」という言葉です。前者は聖書の信仰による生き方をシンプルに言い表している言葉だと思いましたが、後者はヨブ記 1 : 21 の「主は与え、主は奪う」という言葉に重ねて、47 歳で愛する妻 H さんを癌で亡くした出来事を「神は奪う」と表現しつつも、「しかし最後に残るのは愛」と Y さんが書き添えていかれた。そこにイエス・キリストの信仰をいただいた Y さんの神への感謝と賛美が込められていると感じたのです。

私たちにとって一番大切なのは「どこに」向かって生きるのかという「矢印」ではないかと思います。聖書は私たちに「神に向かう矢印」を示します。Y さんは聖書から「神に向かう矢印」を受け取り、「人生は神からのプレゼント。生き方は神へのささげもの」という信仰の歩みをいただく中で、「最後には愛が残る」という告白に導かれていかれました。この聖書が示す「神に向かう矢印の大切さ」を思い

巡らす中で示されたのが、今朝のルカ 11 章の「たとえ話」です。

この箇所は「真夜中の旅人のたとえ」と呼ばれているものです。弟子たちが「主よ、祈りを教えてください」とお願いした時に、主イエスは「主の祈り」を教えると共にこのたとえ話を話されました。つまりこの「たとえ話」は祈りの基本を教えるものだということです。「真夜中、ある人の家のドアを叩く音がする。こんな夜中に誰だろうとドア越しに尋ねると、ドアを叩いたのは旅人で、疲れ切り、何も食べていないという。『さて、どうしよう。我が家にはパンはないので他所に行ってくれと断るか。それともドアを開けて旅人を受け入れるべきか』。迷いの中でこの人はドアを開けます。そしてこんどは自分が隣の家のドアを叩く人になるのです。すると「何だ、こんな夜中に！」と叱られるのですが、その時、主イエスの言葉が響きます。「友だちだからということではなく、あなたがしつこくドアをたたき続けるなら、ドアは必ず開くだろう。…だから叩き続けなさい！」と。

このたとえ話は「祈り」について何を教えているのでしょうか。その中心は「求めよ、探せ、叩け」という祈りの基本ですが、その際、主イエスは「あなたが自分の『求め』でなく、真夜中の旅人の切実な『求め（祈り）』と出会い、『共に求める者（祈る者）』、『二人で祈る者』とされる時、その祈りは必ず聞かれる。だから諦めるな。神は必ず良いものを与えてくださる！」と励ましてくださっています。

また、この「たとえ話」の中にはチャレンジングな場面が二つ出てきます。一つは、真夜中の旅人の切実な叫びを聴いてしまった時に、その声に応じてドアを開けるのか、それとも聴こえないふりをしてドアを閉めたままにするかというチャレンジ。もう一つは、自分も一緒にドアを叩き始めた時に直面する世間の厳しさというチャレンジです。主イエスはこう言われています。「友人だからということではなく、しつように頼めば開けてもらえる」と。この言葉はどういう意味かということ「世間は厳しい」ということでしょう。「ふだん友だち付き合いしている人も、いざとなると冷たいものだ。僕らが生きているのは、祈り願えばすぐにドアが開く楽観的な世界ではない。それでも、あなたがしつこく粘り強くドアをたくなら、必ず開けてもらえる！ 切実な命のことがらについてあなたが隣人と共に祈る者とされる時、神は必ずその祈りを聞いてくださる！だから諦めずに祈り続けよう！」と、そのように主イエスは私たちを力強く励ましてくださったのです。

あけぼの幼稚園の最初の一步も、大谷賢二牧師がこの真夜中の旅人のドアを叩く音を聴いてしまった、その祈りから始まりました。私たちも、自分の願いではない、真夜中の旅人が切実な命の必要から叩くドアの音を聴いたなら、その時に「人生は神からのプレゼント。生き方は神へのささげもの」という言葉と共に、心の矢印をしっかりと神に向ける大切さを思い起こし、旅人と一緒にドアを叩く者に変えられていきたいのです。「まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる」（13 節）。そう、主イエスは聖霊の注ぎと助けを約束してくださっているのですから。